

守田 貴弘

概念と表現形式

翻訳とはどのような行為なのだろうか。ある言語で語られる内容を別の言語に移し替えるという行為であることは確かだが、原文の形式をどの程度尊重するのか、目標言語での自然さをどこまで優先するのか等、重視するポイントは個人的志向やジャンルによって異なるだろうし、語彙の選択など、時代や文化によって決定される部分もあるだろう。また、翻訳論では思想的な背景や文化的な影響などが議論されることが多いように思われる (cf. 川本 1997)

翻って認知言語学では、概念と言語形式の対応関係を問うという方法による類型論が提唱されている (Talmy 2000)。特に移動という外界事象に関しては、移動物、基準物、経路といった各言語に共通する普遍的な意味あるいは概念が設定され、個別言語におけるこれらの概念の実現方法を問うという分析方法がとられている。この枠組みでは、表現される概念の数が予め限定されており、形式面に関しても、動詞なのか、副詞や動詞接辞などの動詞周辺要素なのか、前置詞や格助詞のような名詞周辺要素なのかといった統語的範疇で区切られている。そのため、たとえばフランス語で表現される小説世界を日本語で再現するにあたって、フランス語での概念と形式の対応関係が日本語でどのように表現されるのか分析することが比較的容易である。そして、こと移動表現に関しては、意味と形式の対応関係は日仏の間で一致することがかなり多いと言える¹。

- (1) a. Un pied devant l'autre, en courant presque, je trottais dans le couloir pour aller répondre au téléphone. (Salle)²
- b. 大股で、ほとんど走るようにして、電話に出ようと廊下を急いだ。

- (2) a. 緒永久が土手を駆け降り、葦原の方へと逸れたので、[...] (白仏)
- b. Quand Otowa descendit le talus en courant, puis s'échappa vers la roselière, [...]

まず、(1)の対応関係を見てみよう。「様態」という概念は概略、「どのように」という問いに答えられる要素と見ることができ、(1a)では様態が *un pied devant l'autre* (副詞的用法の独立名詞句) と *en courant presque* (ジェロンディフ=動詞の従属形) によって表現されている。また、主動詞も *trotter* が使われており、移動の事実とともに急ぎ足という様態がさらに重ねられていると考えることができる。移動の経路に関しては、通過される中間領域が *dans* (前置詞=名詞周辺の要素) によって導入されている。対応する日本語訳 (1b) でも、様態は副詞句「大股で」、動詞を伴う副詞句「ほとんど走るようにして」、そして主動詞「急いだ」で表現され、経路についても名詞に付加される格助詞「を」で表現されており、意味と形式の対応関係はフランス語と日本語の間で非常に似ている。(2)は日本語からフランス語への翻訳だが、概念と形式の対応関係はやはり一致している。様態は動詞従属形である連用形「駆け」とジェロンディフ *en courant*、移動の方向は主動詞相当の「降り」と *descendit* で表されている。

このように、意味と形式の対応関係が類似することが多い一方で、ずれも観察される。以下では、「行く/来る」、*aller/venir* という話者の視点を含んだ直示動詞を中心に、語り手の視点のずれについて考えてみたい。

視点のずれの発生

通常、フランス語と日本語の間での翻訳では、情報量も統語構造も一致することが多いことは(1)および(2)で示した通りである。しかし、「行く」「来る」、*aller, venir* という話し手の視点を含んだ表現に関しては不均衡になる傾向

がある。

- (3) a. Dans le ciel, quantité d'oiseaux tourbillonnent et plongent parfois dans les eaux du port pour en ressortir avec dans leur bec l'éclat d'argent d'un poisson. (Linh)
- b. 空にはたくさんの鳥が旋回し、ときおり港の水に潜っては、嘴に銀色に輝く魚をくわえて飛び出てくる。

(3a)では、*en ressortir*は「水の中から再び出る」ことを表している。対する翻訳では、「飛ぶ」という様態とともに「くる」という直示方向が補われており、原文にはない情報が付加されていると言える。その気になれば、「ときおり港に潜っていったは、[...]飛び出てくる」というように「行く」も加えることができる。つまり、原文では客観的に描写されている鳥の移動が、陸にいる観察者 (= 主人公に重ねられた語り手の視点) という視点を帯びることになる。

このように、フランス語から日本語への翻訳では直示動詞「行く」「来る」が付加されることが非常に多い。また逆に、日本語からフランス語への翻訳では、直示動詞を含んだ「出て行く」「入って来る」といった日本語の複雑述語に対して、フランス語では経路を表す動詞のみで翻訳されることが多くなる。

- (4) a. 彼に島を出ていく勇気がないのは稔には分かっていた。 (白仏)
- b. Minoru savait très bien que son camarade n'aurait jamais le courage de quitter l'île.
- (5) a. 鐵造が駆け寄ってきて稔の肩を叩いた。 (白仏)
- b. Tetsuzo s'approcha et tapa sur l'épaule de son camarade.

(3)~(5)のずれは、基本的には日本語とフランス語の形態・統語構造の違いに説明を求めることができる。フランス語の *aller/venir* は着点を必要とするため、*plonger* のように予め着点を含んでいる動詞と重ねることができず、*quitter* や *sortir* のように起点を含んだ動詞とも

矛盾が起こるため共起できない。日本語の「行く」「来る」は常に着点を要求するわけではなく、さまざまな動詞と結合することができるため、このようなずれが生じる。これらは各言語で可能な言語構造による制約によって生じる情報量の差と考えることができる。

だが、情報量の違いだけでなく、視点のずれも発生しており、そのずれは時に重要な印象の違いをもたらすようにも思われる。特に(5)の場合には「くる」が含まれていることから、語り手の視点が「稔」にあることが分かるのに対し、フランス語では「鐵造」が参照点となって「稔」を *son camarade* と表現していることから、語り手の視点が入れ替わっているとも考えられる。(5b)から日本語を再復元しようとしたとき、「鐵造は近づいていき」と訳出する可能性も浮上してくるだろう。

次の例では、視点のずれというより、語り手の視点が翻訳によって現れている。

- (6) a. Monsieur Bark a le cœur qui cogne. Ça y est ! Là, tout près, [...] il y a Monsieur Tao-laï, [...] Le vieil homme (=Tao-laï) marche vers lui (=Bark) (Linh)
 b. バルクさんの心臓が跳ねる。やっと見つけた! すぐそこだ、[...]そこにタオ・ライさんがいる。[...]老人はこちらに向かって歩いてくる。

(6a)の最後の文を直訳すれば、「老人は彼に向かって歩く」であり、「行く」が中立的な移動(3人称領域間での移動)を表すことを考えれば「歩いていく」でも良いかもしれない。だが、(6b)では、「こちら」という近称が使われるとともに、直示動詞「くる」も加えられていることから、語り手の視点が *lui* で指される人物と完全に重なっていることが分かる。「彼の方に向かって歩いている／歩いていく」と「こちらに向かって歩いてくる」では視点のとり方がまったく異なる。前述のように日本語は直示動詞が使いやすいという特徴はあるが、乱用すると不用意にその場面の動作主や主人公に「肩入れ」す

ることとなり、原文からのずれが大きくなるようである。

このように「ずれ」だと感じられる例が観察される一方で、直示動詞を加えることで自然な訳が得られることもある。

- (7) a. À chaque arrêt, j'observais les gens qui montaient, surveillais les visages. (Salle)
 b. ぼくは停留所ごとに、乗ってくる人を観察し、警戒した。

フランス語では、移動は *monter* のみによって表されているのに対し、日本語には「乗る」に加えて原文にはない「くる」も加えられている。ここで「乗る人を観察し、警戒した」とすると、急に他人事のような感じになり、主人公がバスの中にいる状況にそぐわなくなってしまう。やはりここでは「くる」を補う必要がある。

これからの課題

以上のように、基本的な形態・統語構造の違いによって直示動詞の用法は日仏の間で異なり、語り手の視点のとり方も変わってくる。ここで問題になるのは、どのような場合であれば直示表現を入れると日仏のずれが大きくなり、どのような場合であれば差が生じず、むしろ日本語でより自然な訳が得られるのかということである。(3)～(7)の例はすべて原文にない直示情報が加わっている点で情報量が異なっているが、訳としての自然さ、正確さもそれぞれのケースで異なっている。おそらく、(3)であれば直示動詞が加わってもあまり違和感はないが、(6)の直示は余計だと感じる人が多いだろう。

直示は話し手を中心とした方向認識の顕れであり、認知言語学的には、このような直示動詞の使用頻度と人間の方向認識に何らかの関係があるのかどうか研究テーマになる。しかし、より実際的に翻訳に生かすためには、直示動詞を加えて翻訳するのが適切な場合、加えない方がよい場合などをできるだけ一般化することが必要になってくるのかもしれない。

【参考文献】

- Malblanc, Alfred, (1985), *Stylistique comparée du français et de l'allemand*, Paris : Édition Didier.
 Morita, Takahiro, (2009), *La catégorisation des verbes de déplacement en japonais et en français*, Thèse de doctorat, EHESS.
 Talmy, Leonard, (2000), *Toward a Cognitive Semantics Vol. II*, Massachusetts : The MIT Press.
 川本皓嗣・井上健, 1997, 『翻訳の方法』東京大学出版会。

¹ 実際、この類型論の枠組みでは日本語とフランス語は同じ類型に入っている。

² 例文の出典は以下の略語で示す。Salle : Jean-Philippe

Toussaint, *La salle de bain*, Paris, Minuit, 1985 (『浴室』野崎敬訳、集英社、1997年)、Linh : Philippe Claudel, *La petite fille de monsieur Linh*, Paris, Stock, 2005 (『リンさ

んの小さな子』高橋啓訳、みすず書房、2005年)、白仏：辻仁成『白仏』文藝春秋、1997年(Corienne Atlan, *Le bouddha blanc*, Paris, Mercure, 1999)。